

### 第3章 文革発動直後の中国を取材

#### 苦渋に満ちた文革への道程

「南ベトナム解放戦線（ベトコン）は、自らの力で勝利するだろう」「北ベトナムでは戦争は起こるまい」一。毛沢東主席が、心を許した米人ジャーナリスト、エドガー・スノーに語った「米国への発信」は、一ヵ月後に衝撃的な形ではね返ってきた。一九六五年二月七日、ジョンソン米政権は「北ベトナム爆撃」に踏み切ったのである。

#### 裏切られた毛の期待

この選択は大きな「誤算」であり、地球的規模での悲劇の始まりとなった。後日談だが、米国のベトナム戦争に関する国防白書を読んだとき、「北爆決定」に際し、米最高首脳部内で激しい論争があったことを知った。賛成派は、北爆を本格化すれば、南部のベトコンは補給路を断たれ、戦闘力が次第に萎えていくと主張した。これに対し、反対派は、ベトコンはあらゆる手段を講じて抵抗力を保ち続けるだろう、と分析していた。そして、後者の見方を示したのが、ほかならぬ米中央情報局（CIA）だった。毛沢東の判断と、CIAの見解の「奇妙な一致」は、いまでも脳裏に強く焼きついている。

ともあれ、米国の「北爆強行」によって、南ベトナムの内戦は国家間の戦争に変容し、かつ北ベトナムを支援する中ソを巻き込む形で進行していった。その結果、ベトナムばかりではなく、周辺諸国から世界各地に、大きな損失と犠牲を強いていった。

#### 北経済政策の手直しへ

中国は、この新事態にどう対処するかで深刻に悩んだと言える。国内では、ベトナム支援を考慮に入れつつ、経済建設・国防体制をどのように再編するか。国外では、米軍によるベトナム戦争の拡大に備え、対ソ関係をいかに取り扱うかという問題であった。この点に関して、当時を回顧したエドガー・スノーが、一九六六年七月三十日付の米誌『ニュー・リパブリック』に興味ある分析をしている。

スノーは、前年一月九日の会見で、毛主席が南ベトナム駐留の米軍の撤退を前提条件とせず、一九五四年のベトナム問題解決に関するジュネーブ協定の条項を実現するため、国際会議を招集できる可能性を示唆した点を想起。そのころなら、中国としても独立・中立のサイゴン政府を容認できたのではないかとしている。だが、二月七日以来の米国による本格的な北ベトナム爆撃によって、毛沢東の期待は裏切られ、中国共産党上層部でも苦渋に満ちた論争が続けられていったというのだ。

これより先、周恩来首相は、第三期全国人民代表大会第一回会議の政府活動報告（六四年十二月）で、六六年に始まる第三次五ヵ年計画の草案は、六五年初めに大衆討議にかけられることになると述べていた。スノーによれば、この計画は中国が最初の核実験（六四年十月十六日）をする前後、すでに上級黨員の間では議論されていた。そして、防衛部門の大幅な増強のないことが分かっていた。しかし、六五年二月以来、五ヵ年計画関連の記事が新聞から姿を消してしまったと指摘。産業の主要部門を防衛産業に振り向けるために、経済政策の手直しを検討しなければならぬ状態に追い込まれたとしている。

#### ソ連の共同行動を拒否

北爆開始後の六五年三月一日、モスクワで世界共産党協議会議が開催された。しかし、中国共産党始め、アルバニア、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、日本、北ベトナムなどが出席せず、十九ヵ国だけで開かれた。討議の中心はベトナム問題であり、同月三日には

米軍撤退を決議し、ベトナム支援のための「共同行動」を呼びかけた。

中国はこれに対して三月二十二日、『人民日報』などで「モスクワ三月会議を評す」という論文を発表。ソ連共産党指導部が、言葉ではベトナムを支援すると言いながら、実際には「米帝国主義に降伏するものだ」と厳しく攻撃した。その後も再三、ソ連の共同行動を論評、「ソ連の新指導部は自己矛盾の苦境に立ち、フルシチョフよりも一層隠された悪賢い危険な修正主義であるから、あくまで対決闘争を堅持する」とし、全世界のマルクス・レーニン主義者との共同闘争を呼びかけていった。

### 「人民戦争の勝利万歳」

だが、ソ連との対決姿勢を強める過程で、米国による「北爆」を含めたベトナム介入は一段と深化していった。さらに、中国指導部がソ連・東欧諸国にかえ、自己の路線の同調者として期待したアジア・アフリカ諸国との関係も、決して思わしく運ばなかった。六五年の後半期から相次いで発生した一連の事態は、それを裏付けている。

インドネシアの軍部による政権掌握、米ソ主導の国連による印パ紛争の解決、第二回 AA 会議の流産、さらにブルンジ、ダオメー、中央アフリカ、ガーナ、キューバとの関係悪化など、中国の外交路線はあちこちで“亀裂”し、後退を余儀なくされていった。複雑で困難な局面を迎えて、中共指導部は六五年秋以来、出先各国の大使を次々に召還、国際情勢の分析と検討に入った。討議の核心が、ベトナム問題をめぐるソ連路線への対処にあったことは疑いない。

このようなときに、毛沢東体制の支配的見解の代弁者として登場したのが、林彪将軍（党副主席兼国防相）だった。彼は、前任の彭德懐国防相が五九年八月の第八期中共中央委員会第八回総会（廬山会議）において、毛主席の面前で大躍進・人民公社政策を批判、また新たな軍事制度や技術を優先的に重視する「軍の近代化」を直言し、それがもとで罷免された後、国防相に就任していた。

かねてから、解放軍内部で政治思想工作の優先論を打ち出してきた林彪は、六五年九月三日付の『人民日報』と『解放軍報』に、「人民戦争の勝利万歳」と題する論文を発表。中国革命の貴重な財産である毛沢東思想のすべてを援用して、新たな難局に立ち向かう姿勢を鮮明にした。

この論文は、抗日戦争勝利二十周年を記念して書かれたものだが、林彪はこの中で、国内革命を通じて体得した「農村根拠地論」を国際舞台に援用し、「世界の農村」（中国本土を含む発展途上地域）から「世界の都市」（米国、西欧など）を包囲するといった世界戦略を展開した。そして、人間が武器よりも重要であることを改めて指摘し、中国が単独で戦って勝利を収め得る唯一の戦争は、巨大な人力と広大な土地と、修正されざるマルクス・レーニン主義に基礎を置く、確固とした指導者に本質的に依存する持久戦であると強調した。

### 毛・林体制の確立へ

国内ではその後、毛沢東思想の大学習、大宣伝が、まさに異常な形で推進された。そして、林彪の率いる人民解放軍の機関紙『解放軍報』がその先頭に立ち、党、政、軍の各分野で、このリーダーシップに対する「挑戦者」を威圧し、糾弾していった。同年十一月からは、後に「四人組」の一人となった姚文元らの手で、文芸分野での整風の口火も切られていった。

「プロレタリア文化大革命」を正式に発動した中国共産党第八期中央委員会第十一回総会（六六年八月一日―十二日）は、こうした内外情勢を総括する重要会議だった。そして総会コミュニケが、毛沢東以外ではただ一人、林彪の名前をあげ、「全党・全国の輝かしい手本」とたたえ、「人民戦争の勝利万歳」を党の綱領的文献に指摘した点は注目される。

それは、毛沢東―林彪ラインの確立であり、中国革命の伝統的遺産である「人民戦争の論理」の再確認であった。別の言い方をすれば、“米帝国主義”とはもちろん、ソ連の“現代修正主義”とも真っ向から対決する姿勢を宣言した会議であった。これは同時に、国内の“資本主義の道を歩む実権派”に対する闘争を一段と強化することを意味していた。

当時の私は、毛沢東が中国革命と同じ命題を背負う「被圧迫民族」「被圧迫人民」の闘争を断固支持し、米ソを相手に渡り合う壮図に、共感を覚えていた。また、この重圧の中で、広範な若者や人民大衆を立ち上がらせた非凡な指導力に敬意を表していた。そして、前途に横たわる障害に気づきつつも、それらを過小評価していた。

一つは、毛沢東の打ち勝たねばならぬ当面の敵対者が、内戦時代の国民党や、過去の日本軍と違い、全世界に圧倒的な核戦力を誇示する米ソ二大強国であること。二つは、米国の「北爆」に対するソ連の「共同行動」の呼びかけなどで、中国が最も重視していたAA諸国との連帯、また日本共産党を含めた世界各地の共産党組織との関係に次々と亀裂が入っていったという事実。三つは、大躍進・人民公社政策の失敗の調整過程で、劉少奇、鄧小平らが示した一定の功績と生産大衆の反応に対する配慮が欠けていたこと。中国革命は、マルクス・レーニン主義の中国における具体化の成功であった。しかし、中国が自己の経験を全世界に適用しようとしたとき、外にも内にも、大きく複雑な障壁が待ち受けていた。

にもかかわらず、「文化大革命」を発動して党中央の実権を掌握した毛沢東は、自らが育て上げ、林彪の率いる「人民解放軍」を携えて、荒波の大海原に立ち向かっていくのだった。

## 紅衛兵旋風と打撃面の拡大

一九六六年の夏から初冬にかけて、中国大陸は首都・北京を中心に「紅衛兵旋風」が吹き荒れた時期だった。世界中がこの動きに振り回され、特に報道機関はテンテコ舞いの忙しさとなった。中国問題担当の若手記者だった私は、デスクや同僚たちと連日連夜、外報部の六角机に釘付けとなり、北京からの特派員電や外電、また米ソを始め世界各地からの反響の処理に追われていた。

## 劉少奇の降格が顕著に

中国共産党第八期中央委員会第十一回総会（六六年八月一日―十二日）の後を受けて、八月十八日の北京では「プロレタリア文化大革命の勝利を祝う百万人大集会」が開かれた。毛沢東は軍服姿で天安門に現れ、陳伯達（党中央文革小組組長）の司会で、「毛主席の最も親密な戦友」となった林彪が、「毛主席と党中央を代表して」演説を行った。

このとき、北京放送は、主要出席者の氏名を毛沢東、林彪、周恩来、陶铸、陳伯達、鄧小平、康生、劉少奇、朱徳、李富春、陳雲の順序で発表、党最高指導部に大きな地位の変動があったことを公にした。それまでの最高指導部の構成メンバーと順位は、毛沢東、劉少奇、周恩来、朱徳、陳雲、林彪、鄧小平となっていた。顕著な変動は林彪がナンバー2に昇進したのに対し、劉少奇が一挙に八位まで格下げとなったことであった。

また、この祝賀集会には、中学、高校、大学生を主体とする「紅衛兵」が参加し、外部の世界に初めて、その存在を明らかにした。彼らは、毛沢東に紅衛兵の腕章と赤いネッカチーフを献じ、それ以後は、毛・林体制を下から支える重要な組織体となっていた。

## 暴れ出した紅衛兵たち

紅衛兵たちは、中一日置いた二十日の夕刻、「打破四旧」「造反有理」を叫んで、北京の街頭に飛び出した。古い思想、文化、風俗、習慣を叩き壊す、という形で始まった紅衛兵旋

風は、たちどころに、旧時代の名残をとどめる商店、街路、遺跡、ホテル、公園などの名称を強引に変更していった。同時に“ブルジョア的色彩”を示す服装、ヘア・スタイル、化粧、口紅、靴の形などを一掃することに手をつけた。

この旋風は、瞬く間に北京から上海、天津、さらに広州、南京、杭州、武漢、長沙、瀋陽など、全国の主要都市に伝播していった。

そして、急激にエスカレーションの方向をたどり、特権階級、特権観念を打破する軟席車（一等車）の廃止、家賃の不払いといった要求から、さらに「民族資本家の定息（利子）を廃止しろ」「人民公社を原型に復帰せよ」「民主諸党派を解散すべし」といった現行の政治、経済、社会制度の変更を求める“政策要求”まで持ち出すに至った。

毛沢東、林彪に代表される新しい党中央指導部は、紅衛兵たちのすさまじい立ち上がり完全に支持した。党中央機関紙の『人民日報』は八月二十二日付の紙面に、「労働者、農民、兵士は革命的學生を断固支持せよ」および「大いによろしい」と題する二つの社説を掲げ、これら“革命の若大将”たちの行動を激励した。

しかし、紅衛兵運動には、かなりの行き過ぎが目立ち始め、中には「革命の規律」「革命の秩序」さえ逸脱した暴力行為、無政府主義的傾向が現れ始めた。このため、党中央も二十八日付の『人民日報』を通じて、「革命青少年は人民解放軍に学ぶべきだ」と指示し、「武闘を排し、文闘を用いよ」と呼びかけた。そのエネルギーの大方向は支持しながらも、これらを組織し、規律性ある行動に隊列化しようとしたのである。

#### 高級幹部、次々槍玉に

八月三十一日には、毛沢東と紅衛兵が対面する第二回紅衛兵激励集会が行われた。林彪はこの集会でも演説し、「資本主義の道を歩む実権派打倒という目標の重点をつかみ、武闘を排し文闘を進めよ」と強調した。一方、周恩来（首相）は「紅衛兵は高度に組織、訓練され、政治的自覚を持った解放軍の信頼すべき予備軍である」と激励するとともに、全国の大学生全員と、中学、高校生の一部を北京に招き、経験交流を行うと発表した。

これが大きな契機となり、以後、爆発的な紅衛兵の北京詣でが始まる。そして、まるで巨大な桶の中で皮をむかれる里芋のように、紅衛兵たちの全国的規模での大交流に発展していった。ところで、この集会では江青（毛沢東夫人）が党中央文革小組第一副組長の資格で司会を務め、文化大革命で重要な役割を演じていることが明らかにされた。

注目されたのは、紅衛兵運動の進展に伴って、中国共産党につながる既存組織共産主義青年団、少年先鋒隊、総工会、全国婦女連合会などの消息が、ほとんど聞かれなくなったことだ。

しかも、共産主義青年団や少年先鋒隊の指導機関幹部が批判され、槍玉に上げられるという消息も各地で伝えられ、やがてこれらのほとんどが機能停止状態にあることが判明した。

九月に入ると、紅衛兵たちは林彪演説に従って、闘争の矛先を党や国家機関の、いわゆる「資本主義の道を歩む党内の一握りの実権派」に向けていった。しかし、批判された大物は、伝えられただけでも三十数人に上り、地方の第一級幹部ばかりでなく、党中央最高指導部の周辺にも及び始めた。

#### 劉少奇、なお国家主席

とは言え、こうした批判闘争は必ずしも順調には進まず、かえって各地で紅衛兵同士、紅衛兵と労働者、農民大衆の衝突事件を誘発し、拡大するという傾向を生んだ。このため『人民日報』は九月五日、七日、十五日付の紙面を通じて、①文闘を用い、武闘を用いないようにすること、②紅衛兵は労働者、農民に学び、生産を阻害するような経験交流は避けること、③秋の取り入れを手伝い、併せて農民の革命的精神を学習すること、などを呼

びかけた。こうした中で迎えた十月一日の第十七回国慶節（中華人民共和国成立記念日）は、参加者百五十万人という新記録を示した。大半が紅衛兵で、人民解放軍が七年ぶりに登場したのが特筆される。この日、外部の関心は、劉少奇がどう処遇されるかという一点に集中していた。北京放送や新華社電は、大会に出席した中国首脳の名前を毛沢東、林彪、劉少奇の順で発表、この段階では劉少奇が国家主席として処遇されていることが判明した。

しかし、国慶節の祝賀気分が収まると、しばらく小康状態を保っていた紅衛兵運動が再び活発化して、特に指導的幹部に対する総点検とも言うべき大規模な批判活動が展開され出した。そして、薄一波（副首相・国家経済委員会主任）、陳毅（副首相・外相）、譚震林（副首相・農村弁公室主任）、李富春（副首相・国家計画委員会主任）、陳正人（第八機械工業相）一と、中央政府の中枢部にいる副首相と大臣のほとんど大半が、軒並みに批判にさらされていった。

十月十八日には、第五回目の紅衛兵激励集会が行われた。そして、同月二十七日には、中国初のミサイル核実験の成功が公表され、「毛沢東思想の勝利」として、大々的に宣伝された。

### 激動の中国へ初の訪問

紅衛兵が登場して二ヵ月余り、東京で「激動の中国」を追いながら、その目まぐるしい変化に振り回されていた。そして、毛沢東の絶大な権威と途方もない舵取りに驚嘆しながらも、中国の行方にはハラハラさせられていた。紅衛兵運動の進展につれて、批判の対象が急速に拡大され、「打撃面の総和」が予想を超えて膨れ上がっていったからだ。

毛沢東は、厳しい米・ソ両大国との対立、アジア、アフリカ諸国からの外交的後退の最中に、なぜ国内においても怒濤のような大革命を断行しなければならなかったのか。「プロレタリア文化大革命」は、中国革命の長い歩みの中で、どのように位置づけられるのか。それはよく、動乱の現実を克服して、中国の大地に根を下ろすことができるのか。また文化大革命は、世界に対してどんな問題を提起しようとしているのだろうか。

こんなことを思いながら、中国の実態にじかに触れてみたいという願いが、日増しに募っていった。そんな十月の初め、耳寄りな話が飛び込んできた。北京で十一月十二日に「孫文生誕百周年記念集会」が開かれ、日本からも訪中代表団が派遣されるというのだ。文化大革命以来、分裂して親中派の組織となった日中友好協会正統本部からの消息であった。代表団には、報道機関の随行者も可能ということだった。

当時の上司だった宮本源七郎・外報部長代理（故人）から、「代表団に同行せよ」と言われた私は、絶好のチャンスとばかり、訪中実現に奔走した。そして、派遣事務局の掌に当たっていた川田泰代女史に会い、粘り強く折衝した。彼女の尽力で結局、代表団には朝日、毎日、読売の三社の随行者が認められ、朝日からは私が訪中することに決まった。

生まれて初めての中国大陸訪問に、胸の高鳴りを抑えることができなかった。

### 広大な大地と紅衛兵の大交流

紅衛兵運動からミサイル核実験まで、いっぺんに雑多な現象が噴出して、世界中の注目を集めている中国。その実態に触れたいという願いが、一九六六年十一月、孫文生誕百周年記念集会（十一月十二日）の訪中友好参観団の一員として実現した。

訪問先は広州、武漢、北京、南京、上海に限られ、しかも二週間の短い旅だった。だが、盛りだくさんのスケジュールと、ある程度の自由行動で、「揺れる中国」の一端に触れることができた。

私にとっては、中国大陸との初の出会いだった。今は昔の感が深い、その中から、忘れ難い体験の一部を、したためておきたい。

「別世界」への第一歩

一九六六年十一月七日。

香港から中国本土に接する終点の羅湖駅で列車を降りると、狭い深圳河を隔てた小高い丘に、横書きの大きなスローガンが見えた。「戦無不勝的毛沢東思想万歳」一戦って勝たぬことなき毛沢東思想万歳一。

いよいよ「別世界」へ入るんだ、という緊張感がはしる。

境界線の深圳河にかかる鉄橋を渡ると、銃を手にした辺境の警備兵が十人近く、直立不動の姿勢で立っていた。その間をぬって深圳の駅舎へ。われわれ一行を出迎えに来た紅衛兵七人が、上手な日本語で、「ようこそ、熱烈に歓迎いたします」と言った。北京大学で日本語を勉強している学生たちだった。

昼食後、広州行きの列車に乗る。辺り一面は、いまとは全く違う農村地帯。車中での旅行日程の説明が終わると、リーダー格の上級生の音頭で、歌唱指導が始まった。

「大海航行靠舵手」一文革発動以来、中国全土を風靡していた革命歌だ。「大海に行くには舵手に頼る。万物の生長は太陽に頼る。雨露が穀物の苗床を潤すように、革命をやるには毛沢東思想が必要だ。……毛沢東思想は沈まぬ太陽である」

いかにも、若者の心を奮い立たせるような歌詞と旋律だ。

車窓の両側には、南方特有の荔枝の果樹園が続く。晩秋なのに、緑豊かな大地だ。

#### 気炎を上げる紅衛兵たち

広州駅に着くと、すぐさま行動開始。毛沢東が青年時代に教鞭を執った農民運動講習所、革命烈士の陵墓、中山大学の孫文記念館。公共市場は、紅衛兵でごった返していた。中には、綿入れの服を着た者もいる。

「休們從哪裏來的？」（どこから来たの？）と声をかけると、「武漢」「成都」「長春」「西藏」（チベット）と、あちこちから元気のいい声が返ってきた。全国的規模での「串連」（経験交流）が進行中だった。

「郷里を離れて、こんな大交流をするのは生まれて初めて」

「各地での経験交流で、多くのことを学ぶことができた」

彼らは出身地の学校の証明書を手に、必要経費、衣類、靴なども支給されているという。文革以来、学校は閉鎖中なので、各地の校舎が紅衛兵たちの宿舎になっているのだそうだ。

大交流はいつまで続くのか、と尋ねると、口々に「進行到底」と言った。文革が勝利するまでやるというのだ。「文科系はいいとしても、理科系の学生は困るだろう？」と質すと、「関係ない」という勇ましい答え。

中に、アミ袋を背負い、ハダシで歩いている女子中学生たちがいた。「貴陽（貴州省）から」と弾んだ声。アミ袋には三冊の小冊子が入っていた。当時、最も愛読されていた毛沢東の『老三篇』である。

①『爲人民服務』（人民に奉仕せよ）、②『愚公移山』（愚公山を移す）、③『紀念白求恩』（ベチューンを記念する）—簡単に言えば、①誠心誠意、人民大衆に奉仕する精神を忘れず、②それを、どんな困難にぶつかっても貫き通すこと。さらに、③中国の革命戦争で戦傷者の医療に従事、伝染病で死んだカナダの医師、ベチューンの功績を称え、革命の国際的連帯の必要性を説いたものだ。

#### 「世界革命人民的首都」

翌日は、広州市郊外の新華人民公社を見学。その後、花東人民公社で民兵の実弾演習を参観した。

詳しく紹介できぬのが残念だが、実弾演習では、わずか十歳の小学生が、自らの背丈を上回る鉄砲を担いで参加。百五十メートル前方の小さな目標物に対し、十発十中の名演技を披露したのには舌を巻いた。

この日の夕方五時すぎ、広州発北京行きの「特快車」(特急列車)に乗った。大陸縦断の幹線鉄道だ。中国の大地を踏んでまだ二日だというのに、早朝からの強行軍で、いつの間にか、うとうと寝入っていた。

「ガタン」という大きな音で目が覚めた。「韶関、韶関」という駅員の声。腕時計を見ると、もう真夜中。特急で六時間以上も走っているのに、列車はまだ広東省にいるのだ。どんなに飛んでも、お釈迦さまの掌にいる、あの孫悟空の故事が頭に浮かんだ。

いったい、いつになったら北京に着くのだろう？通りかかった「列車員」(車掌)に尋ねると、車掌室に案内された。彼は、北京までの停車駅と所要時間を、いちいち丁寧に教えてくれた。徹底したサービスぶりに感謝して立ち去ろうとしたとき、彼は時刻表の「北京」を赤丸で囲みながら言った。

「北京は中国人民の首都、而且是世界革命人民的首都」(北京は中国人民の首都、そして世界の革命的人民の首都です)

これには、さすがの私も思わず苦笑し、「われわれ日本人の首都は東京ですよ」と言った。彼は一瞬、きょとんとした表情で私を見た。その主観的善意と意気込みには感嘆したが、外国事情に対する無頓着さには別の驚きを覚えた。

果てしなく続く大地

翌朝、ラジオの音で目が覚めた。六時半。毛沢東思想の「活学活用」を呼びかけた林彪副主席の指示が聞こえてくる。

窓外を望むと、どこまでも果てしなく続く大地。変化に富む日本の景色に比べ、中国の風光は何とも波長が長い。

「いまは山中、いまは浜……」幼いころに口ずさんだ日本の童謡がよみがえってきた。

もう野良では仕事が始まっていた。前方の赤旗を目標に、十数人が田畑を耕している。用排水溝はよく整っている。だが、広い沃野に、トラクターは一台も見えない。

十時前、列車は華中の長沙に着いた。毛沢東の生まれ故郷、韶山に近い湖南省委員会の所在地だ。ものすごい人の山。駅の構内に降りると、たちまち数十人の紅衛兵に取り囲まれた。みんな毛主席の生家に行ってきたのだと言う。「自分の家に帰った気持ちだ」と語る者もいた。

「外賓」(外国の賓客)というリボンを見てか、南京から来たという紅衛兵が、韶山の記念バッジを私の胸につけてくれた。最北端の黒竜江省、はるか西の青海省、そして南の果ての海南島から来た若者もいる、と聞いてびっくりした。

反対側のプラットホームに、長沙発の紅衛兵専用列車が十数両連結されていた。超満員の車両のハラには「行李車」(貨物車)と書いてあった。食糧品や工業製品の輸送に大きな影響が出ているのではないか、と思った。

北京、うねる長蛇の列

武漢に一泊。次の日の夕方、再び車中の人となった。翌朝、起床して外を見ると、赤い土は黒っぽく変わり、緑の平野は、小麦の苗、大白菜を除いて、黄色に変わっていた。

赤旗を先頭に三人、五人、七人、多い場合は十数人が一団となって歩いている紅衛兵の姿が目についた。徒歩でテくる“長征隊”である。背中に食糧や毛布を担いで、北京へ、北京へと向かっていく。

特急列車は、三時間以上も遅れて北京に着いた。紅衛兵輸送という加重負担で、ダイヤはかなり乱れている感じだ。しかも、てっきり北京駅に着いたと思ったのに、それが西直門駅と聞いて、二度びっくり。都心の北京駅は目下、紅衛兵の専用駅に使われているのだという。

北京の雑踏は、ケタ外れだった。天安門広場に通ずる幅六十メートルの長安街は、手に

手に『毛主席語録』をかざした全国各地の紅衛兵たちでひしめき、立錐の余地もない状態。その渦の中に飛び込んで、大河のような流れに加わった。すぐ近くで『毛主席語録』の一節をアレンジした合唱が聞こえてきた。

「下定決心、不伯犠牲、排除万難、去爭取勝利」（決意を固め、犠牲を恐れず、万難を排して、勝利をかちとろう）

天安門広場に面した歴史博物館に、大書されたスローガンの垂れ幕が見えた。

「人民、只有人民、才是創造歷史的動力」（人民、人民のみが、歴史を創造する原動力だ）

こんな毛沢東の呼びかけに応え、若く、貧しく、名もない紅衛兵の長蛇の列が、延々と熱狂的に揺れ動いていた。

## 垣間見た首脳部の地殻変動

### 厳しい序列まざまざ

十二日午後。首都・北京の心臓部、天安門広場の西側にそびえる人民大会堂のメインホールには、「万人会堂」の別名どおりに、人民解放軍、紅衛兵、各界代表ら計一万人が席を埋め、「孫中山（孫文）先生生誕百周年記念集会」の開幕が間近に迫っていた。

突然、割れるような拍手が巻き起こって、ヒナ壇に最高指導者たちが姿を現した。

行政府を掌握し続ける周恩来首相を先頭に、宋慶齡、董必武両国家副主席、そのあとに、文化大革命後の処遇で話題の焦点となっている劉少奇国家主席が続く。

思わず立ち上がって、立て続けにカメラのシャッターを切った。われわれは、広い会場の最前列から四番目の列の、ほぼ中央に座っていた。ヒナ壇の指導者たちの表情やしぐさが、よくうかがえる場所であった。

劉主席の次には、日本の国会議長に当たる朱徳全国人民代表大会常務委員長、そのあとにこれまたうわさの人、鄧小平党中央政治局常務委員一。指導者たちは、ヒナ壇の最前列に腰を下ろした。

中央が周恩来首相、その左側（向かって右側）に孫文未亡人の宋慶齡女史、陶鑄（党中央宣伝部長）、鄧小平、朱徳、陳毅（副首相・外相）……の面々。右側に董必武、陳伯達（党中央文化革命小組組長）、劉少奇、李富春（副首相・国家計画委員会主任）、そして車イスで参加した何香凝女史……。

何女史の亡夫は廖仲愷氏で、生前の孫文の右腕として活躍した国民党革命委員会の重鎮。いまは亡き廖承志中日友好協会会長の実母である。

### 明暗を分ける周と劉

毛沢東党主席と林彪副主席を除く、中国の最高指導部の要人が、ほとんどすべて顔をそろえている。国民党と共産党の双方から「国父」と呼ばれてきた孫文の評価をめぐって、紅衛兵たちの間で激論や衝突まで出たというニュースも、これだけの首脳が集まったところをみると、大した影響は生んでいない様子だ。ただ、陳毅外相と、何香凝女史の車イスの後ろに立つ廖承志会長の頭髪が真っ白になっていたのが気にかかった。やはり文革は大きな心理的圧力となっているのだろう。

午後四時一解放軍の「義勇軍行進曲」（国歌）の吹奏に続いて、董必武副主席が開会のあいさつ。そのあと周恩来首相が壇上に立った。濃い眉、大きな目玉。灰色の人民服に身を固めた周首相の血色は非常によく、七十歳とは思えぬかくしゃくとした、いでたちだ。声にも力がある。

周演説の途中で、ソ連指導部を中心とする「現代修正主義」の非難に及ぶと、ソ連や東欧諸国の代表が、席を立って退場する姿が見えた。その後ろ姿へ、まるで追い出しの氣勢を上げるかのように、一段と高い拍手が浴びせられた。



このとき、問題の人、劉少奇国家主席は、なぜか大勢の拍手には加わず、正面を向いて座ったままであった。あるいは、ヒナ壇の下で手をたたいていたのだろうか。

自髪をきちんとオールバックにすいている。端正な感じだ。しかし、眼前にあるその顔は、表皮に乏しく、むしろ沈んで見えた。

#### 一条のタバコの煙が

周演説が終わると、宋慶齡副主席が若い女性に付き添われて登壇した。亡き夫、孫文の革命家としての生涯を語る女史の表情は引き締まり、やや青ざめて見えた。

と、ヒナ壇に一条の白い煙がのぼった。劉主席が突然、タバコを吸い始めたのである。会場ではだれもタバコは吸わなかった。われわれ一行にも、中国側の接待者が「式典中は、タバコは遠慮するように」と言っていた。劉さんは時折、配布された演説の内容から目を離し、メガネを外したり、かけたりしていた。

ヒナ壇の別のところでは、周首相、董副主席、陳伯達氏らが小声で談笑している。だが、劉主席は、談笑の場から外れた格好に見えた。劉さんがまた、タバコに火をつけた。約二時間の式典の間に、少なくとも四回、タバコを吸った。

孫文未亡人、宋慶齡副主席の講演が終わりに近づくと、周首相がサッと手を伸ばして、未亡人の介添えの女性に登壇するよう合図する。細かいところまでよく気をつく人だ。

毛沢東をたたえる「東方紅」の吹奏で記念式典が終わった。参会者の拍手に送られながら、まず周、宋、董の各首脳らが退場。これに文革で急に上昇した陶铸、陳伯達氏が続いた。すでに席を立ったままで待っていた劉さんが、陳伯達氏のあとに従った。こんな際にも“序列”があるのだろうか。

「那是很難講了」

北京の空には、すでに濃い夕闇が迫っていた。「劉主席が寂しそうに見えたが……」。帰りのバスの中で、われわれ一行の世話をやいてくれた北京大学の女子学生に声をかけた。彼女は一瞬、腫れ物に触られたような困った表情を見せた。だが、慎み深く微笑して、

「那是很難講了」

とだけ言った。それは難しい問題ですね、という答えだ。

かつてのナンバー2、劉少奇氏への“風当たり”は厳しいようだ。長い中国革命の過程で、彼が果たしてきた役割を知る中国の人たちは、どう感じているのだろうか。劉さんの、沈黙の姿を目の当たりに見て、私は心のどこかに割り切れぬものを感じた。

東京に戻って、われわれ一行の中国訪問中に、劉少奇と鄧小平を批判する壁新聞が出ていたことを知った。それは、文革当初から「造反派」の旗手として活躍していた、北京大学の聶元梓ら十人が張り出したものであった。そこには、

「党内の資本主義の道を歩む実権派の第一号と第二号」

とあった。彼らは党中央文化革命小組の江青第一副組長（毛沢東夫人）らと“一心同体”で動いている人たちだった。まだ網膜に焼きついている、あの北京の情景を思い浮かべながら、直感的に、劉さんと鄧さんはやられるな、と思った。

頂点に立つ毛主席は、どんな舵を取っていくのか。「革命不是請客吃飯」（革命は客を招いて、ごちそうすることではない）文革発動の怒吼の中で、そこにはもはや、彼がエドガー・スノーに語ったときの、あの時空を超えた「天命観」は、消えうせてしまったかのようだ。

紅衛兵運動をめぐって、日本にはさまざまな論議があった。いまは亡き著名なジャーナリズム界の大先輩は、「あれはジャリ革命だ」ときき下ろした。毛沢東のやり方は、独裁者・ヒトラーそっくりだ、と言う人もいた。軍国主義時代をもろに体験し、人の世の酸いも甘

いも知り尽くした人々の「一刀両断」の評価であった。

だが、戦後の貧しい学生時代に毛沢東の著作に触れ、長い中国革命の過程で、彼の果たした数々の功績に感銘を受けていた私は、こうした見方には同調できなかった。毛沢東の号令で立ち上がったウンカのような紅衛兵の大群の動きに、中国社会の度し難い「封建的官僚主義」（フューダル・ビュロクラシー）への挑戦を感じていた。

最高指導部内で演じられていた、劉少奇国家主席追い落としの動きには首をかしげながらも、それと密接に結びついているはずの紅衛兵運動には、捨て難い意義を認めようとする、なお多感な少壮期であった。